

# 節用文字の仮名音注

二戸 麻砂彦

A Study of Phonetic Glosses *Kana-onchū* in “Setsuyō-monji”

NITO Masahiko

## Abstract

Dictionaries in Ancient Japanese have been inflected by Chinese Dictionaries. These are divided into three classes, Bushu (部首: parts of Kanji), Igi (意義: meanings of Kanji) and Jion (字音: readings of Kanji) from the point of view about their search systems. These systems were not fit for Japanese Language. And so, Dictionaries by the use of Iroha (イロハ) search system were composed in late Heian period. “Setsuyō-monji” is one of them. This study analyzes *Kana-onchū* (仮名音注: a type of Phonetic Glosses) in “Setsuyō-monji” transcribed in the period of Kamakura.

キーワード: 節用文字、仮名音注、日本漢字音

Key Word: Setsuyō-monji, Kana-onchū, Sino-Japanese

- |               |                  |
|---------------|------------------|
| 0 はじめに        | 5 IV韻類の字音的特徴     |
| 1 節用文字付載の仮名音注 | 6 IIIB韻類の字音的特徴   |
| 2 仮名音注の韻類別考察  | 7 IIIA韻類の字音的特徴   |
| 3 I韻類の字音的特徴   | 8 仮名音注と仮名反切の機能分担 |
| 4 II韻類の字音的特徴  | 9 まとめ            |

## 0 はじめに

お茶の水図書館蔵(成簀堂文庫旧蔵)『節用文字』<sup>(01)</sup>は首尾を欠いた零帖ながら世俗字類抄や色葉字類抄の一諸本として、その複製が公刊された。鎌倉時代の書写か。いわゆる字類抄諸本<sup>(02)</sup>中の原撰本系諸本に関わるものであるかどうか不明である。本稿では仮名音注<sup>(03)</sup>に分析を加え、節用文字における字音把握の解明に取り組む。

## 1 節用文字付載の仮名音注

節用文字は「ヌ」篇の地部に始まり、「ム」篇の飲食部までに至るが、全体は残されていない零帖である。その概要については、すでに述べた経緯がある<sup>(04)</sup>ので、ここでは割愛する。

他の字類抄諸本と同じく、音注としては反切・同音字注・仮名音注の三種類がある。注目すべきは、仮名音注の場合には「反」表示があるものとないものがあり、これを区別すれば、四種類となる。今は仮に「反」表示がある仮名音注を「仮名反切」と呼んでおく。音注の付載状況を確認するため、ヲ篇とヨ篇の掲出例から音注を集約する。

岳	カク反	(仮名反切★節用文字／ヲ・地 02ウ5)
丘	キウ反	(仮名反切★節用文字／ヲ・地 02ウ5)

山梨県立大学 国際政策学部 国際コミュニケーション学科

Department of International Studies and Communications, Faculty of Global Policy Management and Communications, Yamanashi Prefectural University

麻	マ反	(仮名反切★節用文字／ヲ・植物 02 ウ 7)
苧	チヨ反	(仮名反切★節用文字／ヲ・植物 02 ウ 7)
茵芋	インウ	(仮名音注☆節用文字／ヲ・植物 02 ウ 7)
雄	イウ反	(仮名反切★節用文字／ヲ・動物 03 オ 6)
牡	ホ反	(仮名反切★節用文字／ヲ・動物 03 オ 6)
鶯	ト反	(仮名反切★節用文字／ヲ・動物 03 オ 6)
伯父	ハク	(仮名音注☆節用文字／ヲ・人倫 03 ウ 4)
甥	セイ	(仮名音注☆節用文字／ヲ・人倫 03 ウ 6)
己 [上]	キ	(仮名音注☆節用文字／ヲ・人倫 03 ウ 6)
娘	シヤウ	(仮名音注☆節用文字／ヲ・人倫 03 ウ 6)
奢	シヤ	(仮名音注☆節用文字／ヲ・人事 04 オ 3)
頑	元反	(同音字注：節用文字／ヲ・人事 04 オ 5)
囂	キン反	(仮名反切★節用文字／ヲ・人事 04 オ 5)
摺	力合反	(反切　　：節用文字／ヲ・人事 04 オ 6)
摺	徒頼反	(反切　　：節用文字／ヲ・人事 04 オ 6)
讐	切ー之涉反	(反切　　：節用文字／ヲ・人事 04 オ 6)
恩	ヨン	(仮名音注☆節用文字／ヲ・人事 04 ウ 1)
韋	キ	(仮名音注☆節用文字／ヲ・雑物 04 ウ 6)
几	キ反	(仮名反切★節用文字／ヲ・雑物 04 ウ 7)
鼠琴 [□平]	シヨト	(仮名音注☆節用文字／ヲ・雑物 04 ウ 7)
糖煨	タウワイ	(仮名音注☆節用文字／ヲ・雑物 04 ウ 7)
億	ヲク	(仮名音注☆節用文字／ヲ・員数 05 オ 3)
已	イ	(仮名音注☆節用文字／ヲ・辞字 05 オ 5)
迄	コツ反・キ反	(仮名反切★節用文字／ヲ・辞字 05 オ 6)
干	カン	(仮名音注☆節用文字／ヲ・辞字 05 オ 7)
恩許	ヨンヨウ	(仮名音注☆節用文字／ヲ・帖字 06 ウ 3)
冒	モウ反	(仮名反切★節用文字／ヲ・辞字 05 ウ 3)
恩容	ヨンヨウ	(仮名音注☆節用文字／ヲ・帖字 06 ウ 3)
恩顧	ヨンコ	(仮名音注☆節用文字／ヲ・帖字 06 ウ 3)
恩情	セイ	(仮名音注☆節用文字／ヲ・帖字 06 ウ 3)
朦朧	モウロウ	(仮名音注☆節用文字／ヲ・帖字 06 ウ 3)
謳歌	ヲウカ	(仮名音注☆節用文字／ヲ・帖字 06 ウ 4)
排却 [□入]	ハイキヤク	(仮名音注☆節用文字／ヲ・帖字 06 ウ 4)
越渡	ヲツト	(仮名音注☆節用文字／ヲ・帖字 06 ウ 6)
越許	ヲツコ	(仮名音注☆節用文字／ヲ・帖字 06 ウ 6)
越訴	ヲツソ	(仮名音注☆節用文字／ヲ・帖字 06 ウ 6)
烏澁	ヲコ	(仮名音注☆節用文字／ヲ・帖字 06 ウ 7)
汗穢	ヲエ	(仮名音注☆節用文字／ヲ・帖字 06 ウ 7)
愆	ケン反・ケツ反	(仮名反切★節用文字／ヲ・辞字 07 オ 7)
又+心	ウ反	(仮名反切★節用文字／ヲ・辞字 07 ウ 1)
標	ヘウ反	(仮名反切★節用文字／ヲ・辞字 07 ウ 2)

愕	カク反	(仮名反切★節用文字／ヲ・辞字 07 ウ 2)
挫	サ反	(仮名反切★節用文字／ヲ・辞字 07 ウ 3)
踟	チ反	(仮名反切★節用文字／ヲ・辞字 07 ウ 3)
躑	チウ反	(仮名反切★節用文字／ヲ・辞字 07 ウ 3)
緻	チ反	(仮名反切★節用文字／ヲ・辞字 07 ウ 3)
饋	鬼反	(同音字注：節用文字／ヲ・辞字 07 ウ 4)
殆	タイ反	(仮名反切★節用文字／ヲ・辞字 07 ウ 4)
<u>蟲 + 力</u>	サイ反	(仮名反切★節用文字／ヲ・辞字 07 ウ 4)
倨	コ反	(仮名反切★節用文字／ヲ・辞字 07 ウ 6)
陷	タウ反	(仮名反切★節用文字／ヲ・辞字 07 ウ 6)
賄	イウ反・アイ反	(仮名反切★節用文字／ヲ・辞字 07 ウ 6)
<u>足 + 此</u>	チ反	(仮名反切★節用文字／ヲ・辞字 07 ウ 6)
躑	チヤク	(仮名音注☆節用文字／ヲ・辞字 07 ウ 7)
躑	士革反	(反切　　：節用文字／ヲ・辞字 07 ウ 7)
厝	瘡故反	(反切　　：節用文字／ヲ・辞字 07 ウ 7)
餉	カウ反	(仮名反切★節用文字／ヲ・辞字 07 ウ 7)
嵩	息隆反	(反切　　：節用文字／ヲ・辞字 08 オ 1)
厖	切 - 莫江反	(反切　　：節用文字／ヲ・辞字 08 オ 1)
柳 [去]	カウ	(仮名音注☆節用文字／ヨ・地 26 オ 4)
芷	シ	(仮名音注☆節用文字／ヨ・植物 26 オ 5)
恠	クワイ	(仮名音注☆節用文字／ヨ・動物 26 オ 7)
鴟	シ	(仮名音注☆節用文字／ヨ・動物 26 オ 7)
喚	クワン	(仮名音注☆節用文字／ヨ・動物 26 オ 7)
針魚	シム	(仮名音注☆節用文字／ヨ・動物 26 オ 7)
蛄	コ	(仮名音注☆節用文字／ヨ・動物 26 ウ 2)
<u>施 + 虫</u>	シ	(仮名音注☆節用文字／ヨ・動物 26 ウ 2)
嫂	ソウ	(仮名音注☆節用文字／ヨ・人倫 26 ウ 2)
膾	クワク	(仮名音注☆節用文字／ヨ・人躰 26 ウ 2)
津 [平]	シン	(仮名音注☆節用文字／ヨ・人躰 26 ウ 3)
頤 [平]	イ	(仮名音注☆節用文字／ヨ・人躰 26 ウ 3)
娉	ヘイ反	(仮名反切★節用文字／ヨ・人事 26 ウ 4)
邨	ヒツ反	(仮名反切★節用文字／ヨ・人事 26 ウ 5)
欲	ヨク	(仮名音注☆節用文字／ヨ・人事 26 ウ 6)
慾	ヨク	(仮名音注☆節用文字／ヨ・人事 26 ウ 6)
藁	ケツ	(仮名音注☆節用文字／ヨ・飲食 26 ウ 7)
軸	チク	(仮名音注☆節用文字／ヨ・雜物 27 オ 1)
庸	ヨウ	(仮名音注☆節用文字／ヨ・雜物 27 オ 2)
布	フ	(仮名音注☆節用文字／ヨ・雜物 27 オ 2)
攀	ハン	(仮名音注☆節用文字／ヨ・辞字 27 オ 7)
克	コク	(仮名音注☆節用文字／ヨ・辞字 27 オ 7)
擁	ヨウス	(仮名音注☆節用文字／ヨ・辞字 27 ウ 2)

上掲のごとく、ヲ篇においては反切・同音字注・仮名反切・仮名音注いずれもが付載されている。それぞれの篇ごとに見ていくと、全般的には仮名音注（判別のため☆を付した）の割合が高い。ヲ篇それ自体の掲出語数が多いという点を勘案しても、同篇は相対的に仮名反切（判別のため★を付した）が目立つ。それ対して、ヨ篇では圧倒的に仮名音注が施され、仮名反切は二例数えるのみである。これらは増補過程の一端を示していると想像できよう。

節用文字においては、和名をもって語彙の塊集を行い、それをイロハ分類する、すなわち「色葉和名」が字類抄編纂の根幹的な方針であった。掲出語、この場合は漢字であるが、その和訓を知ることを目指した。よって、編纂初期には必要最低限の字音表示（おそらくは反切と同音字注）を行ったと推察する。その場合は切韻などを引用する何らかの出典を参考にしたはずである。

しかし、漢文の訓読や作成に資するという実用性を考えた場合、その字音をも知る必要性が無視できなかったであろう。増補改訂に際して、掲出語によっては音注の付載（おそらくは仮名反切）も進められたと考える。和訓とは区別するという必要から、「反」表示を加え、掲出語の理解を高めたのであろう。あくまで音注は補助的な役割を担ったのであろうが、すでに定着していた字音語や字音以外に読みのない語には音注が必要となった。また、さらなる増補改訂を進めると、多くの字音表示（おそらくは仮名音注）を追求せざるを得なかったと考える。

中国音韻学に基づく漢字音の知識を要求される反切や同音字注は敷居が高いが、仮名による音注は日本語の音節構造に馴化した字音把握のレベルであるから、最も理解しやすい。仮名音注が相当数あるのは、そのような背景も考えられよう。仮名音注と仮名反切の機能分担については後章において述べるが、仮名反切に関わる結論<sup>(05)</sup>を一步進めて、次のような仮説を立てておく。

- C 仮名反切（「反」表示あり）八九例は、日本語に馴化した字音把握を必要とする編纂方針のもと、増補改訂の早い段階において加えられた可能性を指摘しておく。
- D 仮名音注（「反」表示なし）七五六例（熟字の掲出語を含む）は、字音語の充実という編纂方針のもと、後段の増補段階において付載された蓋然性が高い。

さて、音注の分析をするに際しては、字類抄編纂の根幹的な方針「色葉和名」を念頭に置きつつ、和訓との連関を視野に入れて進めなければならない。これまで述べてきたことで明らかである。この点を踏まえながら、節用文字における仮名音注の所載例の一部（ヲ篇とヨ篇）を【表1】に掲げた。表の構成を示しておく。

番号 → 節用文字に存する仮名音注それぞれに通し番号を付した。

\* 熟字の場合、a（第1字）b（第2字）c（第3字）d（第4字）を加えた。

掲出字 → 見出し語。単字および熟字（二字以上）。

\* JIS 外漢字は「部首+諧声符」のように表示した。<sup>(06)</sup>

右注 → 双行または三行による割注の右を右注と略す。

中注 → 三行割注の中央を中注と略す。付注頻度は低い。

左注 → 双行または三行による割注の左を左注と略す。

右傍 → 掲出字の右側を右傍と略す。

左傍 → 掲出字の左側を左傍と略す。

所在 → 篇、部、帖数（現存部分の通し）、表裏、行数の順。

\* 篇はイロハ順、部は意義分類を指す。

【表1】

【ヲ篇】				
番号	掲出字	右注 左注	右傍 左傍	所在
025a	茵芋	ヲカツ、シ ニハツ、シ	インウ	ヲ・植物 02 ウ 7
025b	茵芋	ヲカツ、シ ニハツ、シ	インウ	ヲ・植物 02 ウ 7
026a	伯父	ヲチ 兄父	ハク	ヲ・人倫 03 ウ 4
027	甥	ヲヒ コシウトメ	セイ	ヲ・人倫 03 ウ 6
028	己 [上]	ヲノレ ツチノト	キ	ヲ・人倫 03 ウ 6
029	娘	ヲウ ナメ	シヤウ	ヲ・人倫 03 ウ 6
030	奢	ヲコル 又夸	シヤ	ヲ・人事 04 オ 3
031	恩	ヲン		ヲ・人事 04 ウ 1
032	韋	ヲシカハ 細工具柔皮也	キ	ヲ・雑物 04 ウ 6
033a	鼠弩 [□平]	ヲシ シヨト		ヲ・雑物 04 ウ 7
033b	鼠弩 [□平]	ヲシ シヨト		ヲ・雑物 04 ウ 7
034a	塘煨	ヲキヒ タウワイ		ヲ・雑物 04 ウ 7
034b	塘煨	ヲキヒ タウワイ		ヲ・雑物 04 ウ 7
035	億	ヲク		ヲ・員 05 オ 3
036	已	ヲハル [同] 甚也訖也	イ	ヲ・辞字 05 オ 5
037	干 ← [吁]	カン ← [ヲン]		ヲ・辞字 05 オ 7
038a	恩許	ヲン コ		ヲ・帖字 06 ウ 3
038b	恩許	ヲン コ		ヲ・帖字 06 ウ 3
03a9	恩容	ヲン ヨウ		ヲ・帖字 06 ウ 3
039b	恩容	ヲン ヨウ		ヲ・帖字 06 ウ 3
040a	恩顧 [-顧]	ヲン コ		ヲ・帖字 06 ウ 3
040b	恩顧 [-顧]	ヲン コ		ヲ・帖字 06 ウ 3

041b	恩情	セイ		ヲ・帖字 06 ウ 3
042a	朦朧	モウ ロウ		ヲ・帖字 06 ウ 3
042b	朦朧	モウ ロウ		ヲ・帖字 06 ウ 3
043a	謳歌	ヲウ カ		ヲ・帖字 06 ウ 4
043b	謳歌	ヲウ カ		ヲ・帖字 06 ウ 4
044a	排却 [□入]	ヲヒ ヤカス	ハイキヤク	ヲ・帖字 06 ウ 4
044b	排却 [□入]	ヲヒ ヤカス	ハイキヤク	ヲ・帖字 06 ウ 4
045a	越渡		ヲツト	ヲ・帖字 06 ウ 6
045b	越渡		ヲツト	ヲ・帖字 06 ウ 6
046a	越許		ヲツコ	ヲ・帖字 06 ウ 6
046b	越許		ヲツコ	ヲ・帖字 06 ウ 6
047a	越訴		ヲツソ	ヲ・帖字 06 ウ 6
047b	越訴		ヲツソ	ヲ・帖字 06 ウ 6
048a	烏澣 ←[↑+烏 ↑+許]		ヲコ	ヲ・帖字 06 ウ 7
048b	烏澣 ←[↑+烏 ↑+許]		ヲコ	ヲ・帖字 06 ウ 7
049a	汗穢		ヲエ	ヲ・帖字 06 ウ 7
049b	汗穢		ヲエ	ヲ・帖字 06 ウ 7
756	躑	ヲトル チヤク		ヲ・辞字 07 ウ 7

【ヨ篇】				
番号	掲出字	右注 左注	右傍 左傍	所在
361	柳 [去]	ヨセハシラ 繫馬柱也	カウ	ヨ・地 26 オ 4
362b	白芷	ヨロコヒクサ ヨロヒクサ サカモチ	シ	ヨ・植物 26 オ 5
363a	恠鴟 ←[恠鴟]	ヨタ カ	クワイシ	ヨ・動物 26 オ 7

363b	恠鴟 ← [恠鴟]	ヨタ カ	クワイシ	ヨ・動物 26 オ 7
364a	喚子鳥	ヨフコ トリ	クワン	ヨ・動物 26 オ 7
365a	針魚	ヨロツ	シム	ヨ・動物 26 オ 7
366a	蛄施 + 虫	ヨナムシ	コシ	ヨ・動物 26 ウ 2
366b	蛄施 + 虫	ヨナムシ	コシ	ヨ・動物 26 ウ 2
367	嫂	ヨメ 兄弟妻也	ソウ	ヨ・人倫 26 ウ 2
368	臑	ヨヲ ロ	クワク	ヨ・人躰 26 ウ 2
369a	津頤 [平平]	ヨタ リ	シンイ	ヨ・人躰 26 ウ 3
369b	津頤 [平平]	ヨタ リ	シンイ	ヨ・人躰 26 ウ 3
370	欲	ヨク		ヨ・人事 26 ウ 6
371	慾	ヨク [同]		ヨ・人事 26 ウ 6
372	藁	ヨネノ モヤシ	藁 イ ケツ	ヨ・飲食 26 ウ 7
373	軸	ヨコ カミ	チク	ヨ・雑物 27 オ 1
374a	庸布	ヨウ フ		ヨ・雑物 27 オ 2
374b	庸布	ヨウ フ		ヨ・雑物 27 オ 2
375	攀	ヨツ	ハン	ヨ・辞字 27 オ 7
376	克	コク ← [ヨク] カツ		ヨ・辞字 27 オ 7
377	擁	ヨウス - 擁 [擁笠]		ヨ・辞字 27 ウ 2

## 2 仮名音注の韻類別考察

前節では、節用文字に付載された仮名音注の状況を把握するため、ヲ篇とヨ篇の一覧を和訓等の情報をも含めて出現順に集約した。しかし、仮名音注の字音的特徴を分析するためには、便宜的基準の一つとして、中国語音韻史上における中古漢語が示す中古音 (Ancient Chinese) を掲載することが望まれる。そこで、三根谷説<sup>(07)</sup>による中古音と切韻系韻書の所属韻を加え、先の【表 1】を含む一覧全体を編集し直すことにした。以下、一群の【表 3】～【表 7】が該当するが、紙幅の都合で【表 3】の一部を掲げるにとどめる。

周知の如く、日本語の音節構造は「CV (子音+母音)」と分析できる。それに対して、中国語の音節構造は「IMVF/T」となる。両構造を念頭に置きながら、分析をする。

【表2-01】

I	Initial	頭子音	声母
M	Medial	介音(韻頭)	韻母
V	Principal Vowe	主母音(韻腹)	
F	Final	韻尾(韻尾)	
T	Tone	声調	

まず、韻母(MVF/T)については三根谷説が提示するⅠ・Ⅱ・ⅢA・ⅢB・Ⅳの五韻類に分類する方法を用いる。すなわち「便宜上〈韻腹〉-u-の有無を超えて-a-, -ua-を〈韻頭+韻腹〉としている韻母を-a系と呼び、同時に〈韻尾〉を除く部分が-ia-, -iu-である韻母を-ia系と呼ぶ方法」<sup>(08)</sup>である。また、介母の有無によって、Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ韻類は〈直音韻類〉、ⅢA・ⅢB韻類は〈拗音韻類〉とも分類する。以下、これらの関係を【表2-02】に纏めておく。

【表2-02】

Ⅰ韻類	-a系	-ʌ系		直音韻類
Ⅱ韻類	-a系	-e系		
Ⅳ韻類			-e系	
ⅢA韻類	-ia系	-iʌ系		拗音韻類
ⅢB韻類	-ia系	-ie系	-ie系	

以下、韻類ごとに分けた分析することになるが、仮名音注が示す日本漢字音の把握状態を斜体 *italic* のラテン文字(いわゆるローマ字)<sup>(09)</sup>で集約していく。対応する日本語の音節構造CVを便宜的に表示する手段である。これによって、基本的な字音の対応を集約することになる。ただし、異例が見出されることも予想できる。日本語の音韻史上における音変化を反映する場合には()で囲む処理をする。それ以外の異例(例えば、諧声符読みや誤認など)については[]を用いて表示する。

### 3 I 韻類の字音的特徴

I 韻類には直音韻類 -a系と -ʌ系が含まれる。それぞれ -a-, -ʌ- を主母音(V)としたグループで、等韻図<sup>(10)</sup>の一等欄に配置されるため、いわゆる一等韻とも呼ぶ。以下、I 韻類について切韻系韻書が示す二百六韻を用い三根谷説によって分類した結果を掲げた上で、仮名音注が示す字音の特徴を分析をする。

	-ʼ	-i	-u	-m(p)	-n(t)	-ŋ(k)	-uŋ(uk)
ʼa	歌哿箇	泰	豪皓号	談敢闕盍	寒旱翰曷	唐蕩宕鐸	冬(腫)宋沃
ua	戈果過	泰			桓緩換末	唐蕩宕鐸	
ʼʌ		哈海代	侯厚候	覃感勸合	痕很恨(沒)	登等嶝德	東董送屋
uʌ	模姥暮	灰賄隊			魂混恩沒	登 德	

#### 3-1 -a系の字音的特徴

韻母-a系グループとは、主母音-a-を有する諸韻目、歌/哿/箇韻・泰韻・豪/皓/号韻・談/敢/闕/盍韻・



寒/旱/翰/曷韻・唐/蕩/宕/鐸韻・冬/(腫)/宋/沃韻を指す。なお、記号「/」による区別は四声（平/上/去/入声）を示している。該当する節用文字の諸例（一部）を集約した。

### 3-1-1 -a (歌/哿/箇韻)

次の【表3-01】には歌韻（平声）哿韻（上声）箇韻（去声）所属の諸例が含まれる。節用文字の示す仮名音注は -a で基本的に対応する。-ja 等の異例は存在しない。

基本的な対応 -a を示す諸例のうち、番号 478a「多」の仮名音注「タ」については観智院本類聚名義抄に和音「タ」を見出す。この和音は呉音資料として扱うことができる<sup>(11)</sup>と想定されている。その要点だけを乱暴に言えば、図書寮本類聚名義抄に見える「真云」（真興撰『大般若経音訓』）を観智院本において和音としたことである。ただし、すでに指摘されているごとく、和音の中には漢音系字音を含むことがあり、また漢訳梵語音まで内包する点に留意しなければならない。よって、観智院本類聚名義抄の和音と一致することをもって、いわゆる呉音と単純に捉えるわけには行かない。少なくとも、同書編纂時すでに定着して久しい字音と認識していたことが想定できる。

同じく番号 644b「陀」702b「駝」それぞれの仮名音注「タ」に対しても、観智院本類聚名義抄に和音「タ」があり、いずれも濁音去声点が付加されている。よって、日本漢字音の把握という観点からは「ダ」であったことが明らかになる。なお、番号 043b「歌」の仮名音注「カ」は観智院本類聚名義抄に和音「去」を掲げる。付載する反切「古何反」は平声であり、これに対して和音が去声で把握することを表示している。いわゆる呉音と漢音とでは声調関係が相対的に入れ替わることの傍証になるうか。

多 德何反 オホシ [平平□] … 和タ	(観智院本類聚名義抄/法下 135-6)
陀 オツ [平上] … 音駝 [平] クツル [上上濁上] 和タ [去濁] 陀 正	(観智院本類聚名義抄/法中 043-3)
駝 今正/徒何反/ウサキマ … 又直知 和タ [去濁]	(観智院本類聚名義抄/僧中 100-4)
歌 譌並正多/用上字/古何反 俗哥非/ウタ [上平] … 和云去	(観智院本類聚名義抄/僧中 048-6)

また、番号 666「儺」の仮名音注「ナ」は定着久しい字音という認識をしていた。観智院本類聚名義抄所載の「又那音」あるいは「ナ [去]」によって知られる。中古音が示す頭子音 n-（等韻学の述語では泥母）は、いわゆる非鼻音化（denasalization）現象<sup>(12)</sup>によって、n- > nd- > d- の音変化をする。原則的に、この影響を受けた日本漢音ではダ行音を反映することになる。つまり、日本漢字音において、頭子音 n- がナ行を示す場合には早い段階での字音享受ということが認められる。これを呉音の特徴とするが、中国語音韻史上の基層を異にする点、留意しなければならない。

儺 乃可反 [□上] 又那音/ヲニヤライ [平平上上□/右傍: □□□□フ] … ナ [去]	(観智院本類聚名義抄/佛上 029-8)
------------------------------------------------	----------------------

同じく 686b「奈」の仮名音注「ナ」も指摘できる。ただし、当該例は「青岸渡寺」を指す俗称「奈智（那智）の観音」である。すでに定着久しい固有名詞の字音であった。節用文字は異文「那智」をも掲げるので、当該の観智院本類聚名義抄を掲げておく。和音「ナ」という認識をしている。

那 本音儺 又去声 ナンソ ケツル カク ホ、… 和ナ	(観智院本類聚名義抄/法中 036-3)
-----------------------------	----------------------

【表3-01】

番号	掲出字	右注・右傍 左注・左傍	中古音 I 韻類 /a/	韻目	所在
043b	謳歌	ヲウ カ	ka <sup>1</sup>	歌韻	ヲ・帖字 06 ウ 4
135	鵝	カ	ŋa <sup>1</sup>	歌韻	カ・動物 13 オ 3
216b	戕剗 [平平]	サウカ	ka <sup>1</sup>	歌韻	カ・雑物 17 ウ 5
230a	呵梨勒	カリロク	xa <sup>1/3</sup>	歌/箇韻	カ・雑物 18 オ 6
283a	呵責	カシヤ ク	xa <sup>1/3</sup>	歌/箇韻	カ・疊字 23 ウ 1
284a	苛酷 [□入]	カ コク	ɣa <sup>1</sup>	歌韻	カ・疊字 23 ウ 1
321b	轆軻	カム カ	k'a <sup>1/2/3</sup>	歌/笮 /箇韻	カ・疊字 24 オ 1
330a	苛擔	カタム	ɣa <sup>1</sup>	歌韻	カ・疊字 24 オ 2
478a	多武岑	タフノ ミネ	ta <sup>1</sup>	歌韻	タ・諸寺 34 オ 7
644b	頭陀	ツタ	da <sup>1</sup>	歌韻	ツ・疊字 45 ウ 2
666	讎	ナ	na <sup>1</sup>	歌韻	ナ・人倫 48 ウ 5
702b	駱駝	ラクタ	da <sup>1</sup>	歌韻	ラ・動物 53 オ 7
232	箇	カ	ka <sup>3</sup>	箇韻	カ・方角 18 ウ 3
244	賀	カ	ɣa <sup>3</sup>	箇韻	カ・辞字 20 ウ 1
686a	奈智 [那イ]	ナチ	na <sup>3</sup>	箇韻	ナ・寺 52 ウ 6

## 3-1-2 -ua (戈/果/過韻)

次の【表3-02】には戈韻（平声）果韻（上声）過韻（去声）所属の諸例が含まれる。節用文字の示す仮名音注は *-wa*, *-a* で基本的に対応する。両者はカ行（声母 *k*-系、いわゆる牙喉音<sup>(13)</sup>）を日本語の音節構造に馴化させた場合）とカ行以外の字音把握を示している。なお、*-ja* 等の異例は存在しない。

基本的な対応 *-wa* を示す諸例のうち、番号 080「和」の仮名音注「ワ」については観智院本類聚名義抄に和音「ワ」を見出す。ところが、番号 091b「貨」の仮名音注「クワ」は観智院本類聚名義抄に和音「クエ」を掲げる。呉音による経本文の読誦音を掲げる金光明最勝王経音義<sup>(14)</sup>の同音字注「化」も呉音的特徴を持つ「クエ」を標音すると推測する。

和 ヤハラカナリ [右傍：□□□□ニ/左傍：□□□□ク<sup>[平韻]</sup>] … 和ワ [去] (観智院本類聚名義抄/法下 012-5)

貨 [去] 化ㄥ/寶也 (金光明最勝王経音義/06 オ 2)

貨 呼臥反 タカラ [平平] … 和クエ [平平] (観智院本類聚名義抄/佛下本 014-3)

また、基本的な対応 *-a* を示す諸例のうち、番号 525c「婆」687b「波」それぞれの仮名音注「ハ」については、観智院本類聚名義抄に和音「ハ」を見出す。ただし、掲出字「婆」の場合、和音には去声濁点を付加しているため、結果的には「バ」という字音の把握である。番号 105「鑣」の仮名音注「サ」は、金光明最勝王経音義に「佐音」とある。

婆 音幡 - 婆舜 / ハ、和ハ [去濁] (観智院本類聚名義抄 / 佛中 023-2)  
 浪 音幡 ナミ [平平] … 和ハ (観智院本類聚名義抄 / 法上 020-2)  
 鑣 [去] 又作鑣 佐 ☺ (金光明最勝王経音義 / 05 ウ 2)

なお、番号 213「擽」の仮名音注「ルイ」は「累」を諧声符読みしたと認定できる。観智院本類聚名義抄の同音字注「螺」は正確な字音把握をしている。

擽 音螺 理 (観智院本類聚名義抄 / 佛下本 071-2)

【表3-02】

番号	掲出字	右注・右傍 左注・左傍	中古音 I 韻類 /a/	韻目	所在
070a	倭琴	ワコン	'ua <sup>1/2</sup>	戈 / 果韻	ワ・雑物 09 オ 6
080	和	ワス	ɣua <sup>1/3</sup>	戈韻	ワ・辞字 10 ウ 3
213	擽	ルイ	lua <sup>1/3</sup>	戈 / 過韻	カ・雑物 17 ウ 4
525c	寧都婆	ソトハ	ba <sup>1</sup>	戈韻	ソ・地 36 オ 3
625	鍋	クワ	kua <sup>1</sup>	戈韻	ツ・雑物 41 ウ 3
636a	覩縷	ラロウ	lua <sup>1</sup>	戈韻	ツ・疊字 45 オ 6
670	埵	クワ	kua <sup>1</sup>	戈韻	ナ・雑物 49 ウ 7
687b	難波	ナンハ	pa <sup>1</sup>	戈韻	ナ・國 52 ウ 7
713a	螺鈿	ラテン	lua <sup>1</sup>	戈韻	ラ・雑物 53 ウ 3
721a	覩縷	ラロウ	lua <sup>1</sup>	戈韻	ラ・疊字 53 ウ 7
105a	鑣 [上]	サ	sua <sup>2</sup>	果韻	カ・地儀 11 ウ 6
187a	粿米	クワヘイ	kua <sup>2</sup>	果韻	カ・飲食 16 オ 4
410b	絡罽 [入上] ← [絡土 + 朱]	ラクタ ← [ヨクタ]	dua <sup>2</sup>	果韻	タ・雑物 29 ウ 6
719b	嬾墮	ラタ	dua <sup>2</sup> t'ua <sup>2</sup>	果韻	ラ・疊字 53 ウ 7
091b	賄貨	ワイ クワ	xua <sup>3</sup>	過韻	ワ・帖字 11 オ 1

### 3-2 -a系の基本的な表記

上記では【表3-01】と【表3-02】を掲げたが、すでに【表3-11】まで解析をしている。紙幅の都合があり割愛せざるを得ないが、以下その分析した結果をまとめる。なお、日本語音韻史における音変化を反映する場合には ( ) で囲む処理をする。それ以外の異例（例えば、諧声符読みや誤認など）については [ ] を用いて表示する。

-a	〔歌/哿/箇韻〕	-a	-ua	〔戈/果/過韻〕	-a -wa <k-系> [-ui]
-ai	〔泰韻〕	-ai	-uai	〔泰韻〕	(-e)
-au	〔豪/皓/号韻〕	-au (-ou)			
-am	〔談/敢/闕韻〕	-am (-an)			
-ap	〔盍韻〕	-ap (-au)			
-an	〔寒/旱/翰韻〕	-an (-a)	-uan	〔桓/緩/換韻〕	-an -wan <k-系> [-en]
-at	〔曷韻〕	-at	-uat	〔末韻〕	-at
-aŋ	〔唐/蕩/宕韻〕	-aũ (-oũ)	-uaŋ	〔唐/蕩/宕韻〕	-waũ <k-系> (-oũ) [-wai]
-ak	〔鐸韻〕	-ak -aũ <k-系> (-o)	-uak	〔鐸韻〕 *例なし	
-auŋ	〔冬/宋韻〕	-oũ			
-auk	〔沃韻〕	-ok (-o)			

ここで、-a系における節用文字の仮名音注が示す基本的対応を表にまとめると、-a系は a (日本語のア列音) で対応し、日本漢字音として把握する。-o (オ列音) で対応する場合は、唇的頭子音および円唇的韻尾 -u, -uŋ/-uk の影響を想定できる。

また、呉音の特徴であるか、漢音の特徴であるか、その判別をし得ない場合が多い。先んじて定着した字音が日本語に馴化して定着しており、すでに重層的な様相を呈していたと想像する。その後導入した異なる基層を持つ中国語音の特徴が混淆した状態と言える。

	-φ	-i	-u	-m	-p	-n	-t	-ŋ	-k	-uŋ	-uk
-a	-a	-ai	-au -ou	-am (-an)	-ap (-au)	-an (-a)	-at	-aũ (-oũ)	-ak -aũ (-o)	-oũ	-ok (-o)
-ua	-a -wa	(-e)				-an -wan	-at	-waũ (-oũ)			

### 3-3 -Λ系の基本的な表記

韻母 -Λ系グループとは、主母音 -Λ- を有する諸韻目、模/姥/暮韻・哈/海/代韻・灰/賄/隊韻・侯/厚/候韻・覃/感/勘/合韻・痕/很/恨/(没)韻・魂/混/恩/没韻・登/等/嶝/德韻・東/董/送/屋韻を指す。

以下、-Λ系における節用文字の仮名音注が示す基本的対応を表にまとめておくと、-Λ系は *o* (日本語のオ列音) で対応し、日本漢字音として把握する。やはり、呉音的特徴であるか、漢音的特徴であるか、その判別をし得ない場合が多い。

	-φ	-i	-u	-m	-p	-n	-t	-ŋ	-k	-uŋ	-uk
-Λ		-ai	-ou -o -u	-am (-an)	-ap (-au)	-on (-in)		-oũ	-ok	-oũ -uũ	-ok
-uΛ	-o -u	-ai -wai				-on -un	-ot		-wak		

## 4 II 韻類の字音的特徴

II 韻類には直音韻類 -a系 -e系 が含まれる。それぞれ -a-, -e- を主母音 (V) としたグループで、等韻図の二等欄に配置されるため、いわゆる二等韻とも呼ぶ。

	-'	-i	-u	-m(p)	-n(t)	-ŋ(k)	-uŋ(uk)
'a	麻馬禡	夬	肴巧効	銜檻鑑狎	刪澹諫鎋	庚梗映陌	江講巧覺
ua	麻馬禡	夬			刪澹諫鎋	庚梗映陌	
'e	佳蟹卦	皆駭怪		咸賺陷洽	山産禡黠	耕耿諍麥	
ue	佳蟹卦	皆駭怪			山 禡黠	耕 諍麥	

### 4-1 -a系の基本的な表記

韻母 -a系グループとは、主母音 -a- を有する諸韻目、麻/馬/禡韻・夬韻・肴/巧/効韻・銜/檻/鑑/狎韻・刪/澹/諫/鎋韻・庚/梗/映/陌韻・江/講/巧/覺韻を指す。

以下、-a系における節用文字の仮名音注が示す基本的対応を表にまとめておくと、-a系は *a* (日本語のア列音) で対応し、日本漢字音として把握する。一部 -e (エ列音) で対応する場合がある。やはり、呉音的特徴であるか、漢音的特徴であるか、その判別をし得ない場合が多い。

	-φ	-i	-u	-m	-p	-n	-t	-ŋ	-k	-uŋ	-uk
-a	-a -e	-ai	-au -eu	-am -em	-ap	-an		-aũ -jaũ -ei	-ak	-aũ	-ak -ok
-ua	-wa	-wai				-an- wen		-waũ			

#### 4-2 -e 系の基本的な表記

韻母 -e 系グループとは、主母音 -e- を有する諸韻目、佳/蟹/卦韻・皆/駭/怪韻・咸/賺/陷/洽韻・山/産/禰/黠韻・耕/耿/諍/麥韻を指す。

以下、-e 系における節用文字の仮名音注が示す基本的対応を表にまとめておくと、-e 系は *a* (日本語のア列音) で対応し、日本漢字音として把握する。一部 -e (エ列音) で対応するが、呉音系字音が反映した結果であろう。やはり、呉音の特徴であるか、漢音の特徴であるか、その判別をし得ない場合が多い。

	-φ	-i	-u	-m	-p	-n	-t	-ŋ	-k	-uŋ	-uk
-e	-ai -ja -e	-ai		-am	-au	-an -en	-at	-aũ- jaũ	-ak (-aũ) -jak -ek		
-ue	-ai	-wai							-wak		

### 5 IV 韻類の字音の特徴

IV 韻類には直音韻類 -e 系が含まれる。それぞれ -e- を主母音 (V) としたグループで、等韻図の四等欄に配置されるため、いわゆる四等専属韻とも呼ぶ。

	-ʼ	-i	-u	-m(p)	-n(t)	-ŋ(k)	-uŋ(uk)
ʼe		齊齊霽	蕭篠嘯	添忝栻帖	先銑霰屑	青迥徑錫	
ue		齊 霽			先銑霰屑	青迥徑錫	

#### 5-1 -e 系の基本的な表記

韻母 -e 系グループとは、主母音 -e- を有する諸韻目、齊/齊/霽韻・蕭/篠/嘯韻・先/銑/霰/屑韻・青/迥/徑/錫韻を指す。

以下、-e 系における節用文字の仮名音注が示す基本的対応を表にまとめておくと、-e 系は *e* (日本語のエ列音) で対応し、日本漢字音として把握する。一部 -a (ア列音) で対応する。やはり、呉音の特徴であるか、漢音の特徴であるか、その判別をし得ない場合が多い。

	-φ	-i	-u	-m	-p	-n	-t	-ŋ	-k	-uŋ	-uk
-e		-ei -ai	-eu	-em	-ep (-eu)	-en	-et	-eĩ -jaũ	-ek -jak		
-ue						-wen	-wet				

## 6 III B 韻類の字音的特徴

III B 韻類には拗音韻類 -ia 系 -iΛ 系 が含まれる。それぞれ -a-, -Λ- を主母音 (V) としたグループで、等韻図の三等欄に配置されるため、いわゆる三等専属韻とも呼ぶ。

	-ʼ	-i	-u	-m(p)	-n(t)	-ŋ(k)	-uŋ(uk)
ia		廢		嚴儼醜業	元阮願月	陽養漾藥	鍾腫用燭
iua		廢			元阮願月	陽養漾藥	
iΛ	魚語御	微尾未	尤有宥	凡苑梵乏	欣隱焮迄		東 送屋
iuΛ	虞麌遇	微尾未			文吻問物		

### 6-1 -ia 系の基本的な表記

韻母 -ia 系グループとは、主母音 -a- を有する諸韻目、廢韻・嚴/儼/醜/業韻・元/阮/願/月韻・陽/養/漾/藥韻・鍾/腫/用/燭韻を指す。

以下、-ia 系における節用文字の仮名音注が示す基本的対応を表にまとめておくと、-ia 系は *a, ja* (日本語のア列音) で対応し、日本漢字音として把握する。一部 -o (オ列音) で対応する。また、中国語音を忠実に把握しようとする工夫があり、複雑な仮名音注を示す場合がある。やはり、呉音的特徴であるか、漢音的特徴であるか、その判別をし得ない場合が多い。

	-φ	-i	-u	-m	-p	-n	-t	-ŋ	-k	-uŋ	-uk
-ia						-an -on -en	-ot	-aũ -jaũ	-ak -jak	-oũ- joũ -wjoũ -ũ -uũ	-ok -jok
-iua		-we				-wen	-ot	-waũ	-wak -wjak		

### 6-2 -iΛ 系の基本的な表記

韻母 -iΛ 系グループとは、主母音 -Λ- を有する諸韻目、魚/語/御韻・虞/麌/遇韻・微/尾/未韻・尤/有/宥韻・凡/苑/梵/乏韻・欣(殷)/隱/焮/迄韻・文/吻/問/物韻・東/送/屋韻を指す。

以下、-iΛ 系における節用文字の仮名音注が示す基本的対応を表にまとめておくと、-iΛ 系は *o, u* (日本語のオ列音・ウ列音) で対応し、日本漢字音として把握する。一部 -i (イ列音) で対応する。介音と韻尾に挟まれた主母音 -Λ- が両者それぞれに吸収された結果の反映と想定する。やはり、呉音的特徴であるか、漢音的特徴であるか、その判別をし得ない場合が多い。

	-φ	-i	-u	-m	-p	-n	-t	-ŋ	-k	-uŋ	-uk
-iΛ	-o -jo	-i	-u -iu -ju	(-en)	(-au)	-ou -on				-uũ -iũ	-ok -uk -ik
-iuΛ	-u -ju	-wi				-un -on	-ut				

### 7 IIIA 韻類の字音的特徴

III A 韻類には拗音韻類 -ia 系 -ie 系 -ie 系が含まれる。それぞれ -a-, -e-, -e- を主母音 (V) としたグループで、等韻図の三四等欄に配置されるため、いわゆる三四等両属韻とも呼ぶ。

	-'	-i	-u	-m(p)	-n(t)	-ŋ(k)	-uŋ(uk)
ia	麻馬禡	(齊)(海)祭	宵小笑	鹽琰豔葉	仙獮線薛	庚梗映陌	
iua		祭			仙獮線薛	庚梗映	
ie		之止志			臻 櫛	蒸拯證職	
iue						職	
ie	支紙寘	脂旨至	幽黝幼	侵寢沁緝	眞軫震質	清靜勁昔	
iue	支紙寘	脂旨至			諄準稕術	清靜勁昔	

#### 7-1 -ia 系の基本的な表記

韻母 -ia システムグループとは、主母音 -a- を有する諸韻目、麻/馬/禡韻・祭韻・宵/小/笑韻・鹽/琰/豔/葉韻・仙/獮/線/薛韻・庚/梗/映(敬)/陌韻を指す。

以下、-ia 系における節用文字の仮名音注が示す基本的対応を表にまとめておくと、-ia 系は *e, a* (日本語のエ列音・ア列音) で対応し、日本漢字音として把握する。やはり、呉音的特徴であるか、漢音的特徴であるか、その判別をし得ない場合が多い。

	-φ	-i	-u	-m	-p	-n	-t	-ŋ	-k	-uŋ	-uk
-ia		-ei -ai	-eu (-jau)	-em (-en) -am	(-eũ)	-en (-ei)	-et	-ei -aũ -jaũ	-ek		
-iua		-ei				-en -an	-et -at				

#### 7-2 -ie 系の基本的な表記

韻母 -ie システムグループとは、主母音 -e- を有する諸韻目、之/止/志韻・臻/櫛・蒸/拯/證/職韻を指す。

以下、-ie 系における節用文字の仮名音注が示す基本的対応を表にまとめておくと、-ie 系は *i, o* (日本語のイ列音・オ列音) で対応し、日本漢字音として把握する。やはり、呉音的特徴であるか、漢音的特徴であるか、その判別をし得ない場合が多い。



特徴であるか、その判別をし得ない場合が多い。

	-φ	-i	-u	-m	-p	-n	-t	-ŋ	-k	-uŋ	-uk
-ie		-i -o						-joũ (-eũ)	-ik -ok -jok		
-iue											

### 7-3 -ie 系の基本的な表記

韻母 -ie 系グループとは、主母音 -e- を有する諸韻目、支/紙/寘韻・幽/黝/幼韻・侵/寢/沁/緝韻・眞/軫/震/質韻・諄/準/稕/術韻・清/靜/勁/昔韻を指す。

以下、-ie 系における節用文字の仮名音注が示す基本的対応を表にまとめておくと、-ie 系は *i*（日本語のイ列音）で対応し、日本漢字音として把握する。一部 -ui などでは合口介音に対応する。やはり、呉音の特徴であるか、漢音の特徴であるか、その判別をし得ない場合が多い。

	-φ	-i	-u	-m	-p	-n	-t	-ŋ	-k	-uŋ	-uk
-ie	-i	-i		-im (-in) -om	-ip (-iu)	-in (-im)	-it		-ik		
						-en		-jaũ (-aũ) -eĩ	-ek		
-iue	-ui -wi	-ui -wi				-un (-uun) (-uwin) (-iwin) (-win)	-ot				

## 8 仮名音注と仮名反切の機能分担

仮名音注と仮名反切には、何か機能的な分担があったのだろうか。その問題を考察するために、既出の論考<sup>(15)</sup>で得た反切・同音字注・仮名反切に関わる分析結果を再度掲げる。

- I 反切十五例は最低限の字音把握を必要とした初期の増補改訂段階において加えられた可能性が高い。
- II 反切の出自としては、切韻系韻書に一致する反切が十一例、玉篇に一致する反切が二例。周禮注が一例、不明が一例である。複数に渡る増補改訂の際、切韻系韻書や玉篇などから、それぞれ別々に付載したか、あるいは複数の出典を含む何らかの文献から孫引きしたか、いずれかを想定する。
- III 同音字注は五例と少ないが、掲出字の字音を把握するに際して、留意を要する場合に付載する。その出自は不明である。
- IV 仮名反切（「反」表示あり）八九例は、一定の編纂方針のもと、日本語に馴化した字音把握を必要とした増補改訂の早い段階において加えられた可能性が高い。
- V 仮名反切と仮名音注（「反」表示なし）とは異なる増補段階において付載された。その前後関

係は詳らかではないながらも、仮名音注が後段の増補段階において付加されたと推測する。

字音の把握に際しては、初期の増補改訂段階において反切を基本的とした。これは中国語音が示す規範性を重要視した結果と認められる。ただし、掲出字の字音把握に関して留意を必要とする場合（いわゆる呉音あるいは和音として定着している字音の把握などを含む場合）には反切に依らず、同音字注（○反の表示形式）を付加することがあった。それらの方法でも字音の把握が困難と判断した場合、中国語音には依らず、仮名反切が付載された。よって、増補改訂の早い段階における字音の把握は、反切・同音字注・仮名反切を用いたと推測する。

しかし、さらなる利便性の高い要求があったのであろう。節用文字のような字書は、漢文の訓読や作成において活用が期待されたであろうから、和訓の確認とともに、より多くの掲出字の字音を求める場面もあったはずである。それに応えて、字音語の充実という観点から仮名音注の増補に踏み切ったと想定できる。これは増補改訂の後段に当たると考えられる。実用的な字音把握を可能とするため、より日本語に馴化した仮名のレベルによる標音を目指したわけである。

ここで、掲出語の錯綜や和訓との関係を考慮し、既出の論考で想定した二段階に基づいて、増補改訂の段階と字音付載の状況を纏めておきたい。

- A いわゆる「色葉和名」の基準に基づく和訓語彙の塊集  
（分類体裁としてイロハ順の検索を採用した初期段階）  
→（すでに反切・同音字注・仮名反切の付載をした可能性も残る）
- B 語彙数の増加と字音の付載  
（利便性の向上を目指した増補改訂段階）  
→ 反切・同音字注・仮名反切の付載（増補改訂の前段）  
→ 仮名音注の付載（増補改訂の後段）

## 9 まとめ

現存する節用文字は「色葉和名」を目的とした原初形態の原撰本系諸本とは考えにくく、数度の増補改訂を経た状況を示している。その過程で付載されたであろう仮名音注について、その分析結果を集約しておく。

- VI 仮名音注を示す七五六例<sup>(16)</sup>は、一定の編纂方針のもと、より多くの字音把握を目指す増補改訂が進んだ段階において加えられた可能性が高い。増補改訂の早期に付載された仮名反切とは異なる。
- VII 仮名音注を目指す字音の把握は日本語に馴化した段階を示している。いわゆる呉音の特徴と漢音の特徴を区別する意識はない。中国語音を導入した段階では重層的であったが、やがて渾然と融合した馴化の状況を呈している。

## [注]

- (01) 次の複製を参照した。  
・原装影印版 古辞書叢刊「節用文字」（雄松堂書店、1977年）
- (02) 節用文字などをも含む世俗字類抄や色葉字類抄などの諸本を総称して字類抄諸本とする。単に字類抄と称する文献はない。平安時代末期において常用する基本的な語彙としての和名を塊集し、対応する漢字見出しのもとに掲出字を選択していく、という編纂の原則を持って成立した。いわゆる「色葉和名」とも言える体裁である。この「色葉和名」

は原撰本系諸本と想定できる初期段階の書名にもなっていたらしい。現存する字類抄諸本を示しておく。

【原形本】

[イ] 川瀬一馬蔵本

▶鎌倉時代初期の書写になると推定する零本。原形本と認定できるかは不明。

【節用文字】

[ロ] お茶の水図書館蔵本（成實堂文庫旧蔵）

▶二卷本色葉字類抄を平安時代末期か鎌倉時代初期に書写したともいわれる零本。

【二卷本世俗字類抄】

[ハ] 天理図書館蔵本（松平定信旧蔵）

▶江戸時代中期以降の書写か。

[ニ] 黒川家蔵本

▶元治元年晩夏中旬に黒川春村が書写。

[ホ] 川瀬一馬蔵本

▶黒川家蔵本 [ニ] の手写本。

[ヘ] 東京大学文学部国語研究室蔵本

▶奥書のない黒川家旧蔵本であり、黒川家蔵本 [ニ] とは別の一本。

【三卷本世俗字類抄】

[ト] 水戸彰考館本

▶永正十二年の書写本。戦災で消失したという。これは、[ヘ] 東京大学文学部国語研究室蔵二卷本の表裏に附箋があり、「文学博士橋本進吉云世俗字類抄三卷水戸彰考館ニアリ永正ノ寫本ニシテ順識トアリ」による。

【七卷本世俗字類抄】

[チ] 尊経閣文庫蔵本

▶卷三を欠く六冊本。

【二卷本色葉字類抄】

[リ] 尊経閣文庫蔵本

▶正和四年と応永三十年との二度に渡る伝写を経て、永禄八年に書写。

【三卷本色葉字類抄】

[ヌ] 尊経閣文庫蔵本

▶院政期末あるいは鎌倉初期の書写ともいうが、確かではない。中巻と下巻の一部を欠く。欠落部分については黒川家蔵本の [ル] にて補う。

[ル] 黒川家蔵本

▶江戸中期の書写か。

(03) 仮名による字音注は仮名音注と称するが、節用文字には仮名音注に「反」表示を加えた諸例もある。これを仮名反切と仮称しておく。

(04) 次の文献を参照した。

- ・二戸麻砂彦「節用文字の反切」（山梨県立大学紀要国際研究 第6号、pp.01-18、2011年）
- ・二戸麻砂彦「節用文字の同音字注」（國學院雑誌 114 卷6号、左 pp.01-14、2013年）
- ・二戸麻砂彦「節用文字の仮名反切」（山梨県立大学紀要国際研究 第7号、pp.01-16、2012年）

(05) 注(04)に掲げる「節用文字の仮名反切」を参照した。

(06) 情報機器における日本語表示の規格としては、2004JIS (JIS X 0213: 2004) が策定され 11,223 文字が規定されているが、これで表示できない漢字は当然存在する。いわゆる JIS 外漢字表示方法については、以下の論文に准拠した。部首や諧声符など、漢字の字形パーツを + 記号を使って組み合わせる方法である。当該の漢字には下線を施してある。例えば、「疒+呆」「疒+耒」のように表示する。ただし、情報処理推進機構 (IPA: Information-technology Promotion Agency, Japan) が作成した「IPAmj 明朝フォント」(Ver.002.02: 2013年11月) を使うことで、約六万字の表示や印刷が可能となる。本編の例で掲げれば、「纒」「鞞」「縛」などである。

- ・二戸麻砂彦「パソコンにおける漢字処理/試論」（山梨県立女子短期大学紀要 28、pp.09-18、1995年）
- ・文字情報基盤整備事業 (<http://ossipedia.ipa.go.jp/ipamjfont/> 独立行政法人情報処理推進機構、2012年)

(07) 中古音については三根谷説の推定音によった。

- ・三根谷徹「中古音の韻母の体系 - 切韻の性格 -」（言語研究、31号、1956年）
- ・三根谷徹『越南漢字音の研究』（東洋文庫、1972年）
- ・三根谷徹「唐代の標準音について」（東洋学報、57 卷1・2号、1976年）
- ・三根谷徹『中古漢語と越南漢字音の研究』（汲古書院、1992年 / 1972年の再録を含む）

(08) 注(06)に掲げる『越南漢字音の研究』p.115から引用した。なお、再録の『中古漢語と越南漢字音の研究』p.335

に相当する。

(09) 次の著書 p.017 (I 序説 / 1.4 字音表記とローマ字転写) を参照し援用した。同書が述べるように、ローマ字による転写 (transliterate) 方法は、特に音価を示そうとしたものではなく、日本語の音節構造が把握しやすい点を考慮した表記である。以下に、その転写方針を転載しておく。

・小倉肇『日本呉音の研究 / 第 I 部研究篇』(新典社、1994 年)

- (1) サ行・ザ行の子音は s-/z-, ハ行・バ行の子音は p-/b- で示す。
- (2) 拗音要素は -j- で示す。
- (3) 韻尾 (F) については、-m 韻尾は -m, -n 韻尾は -n, -ŋ 韻尾 / -uŋ 韻尾は -ū, -p 韻尾は -p (-p<sup>u</sup>), -t 韻尾は -t (-t<sup>i</sup>, -tu), -k 韻尾 / -uk 韻尾は -k (-k<sup>i</sup>, -k<sup>u</sup>) で示す。
- (4) 長音は同一母音を重ねた aa, ii, uu, ee, oo で示す。従って、仮名表記の「カウ」「コウ」「コオ」は kau, kou, koo と転写される。

(10) 「等韻図」とは、縦に声母を横に韻母を一定の音声学的な順序をもって配置し、縦横の組み合わせで中国語の音節を体系的に示した図表。一種の音節表で「韻図」とも言う。現存する最古の韻図が『韻鏡』である。作者不明ながら、宋代初めごろに作成されたのではないかと推測する。隋唐時代の音韻体系を図表化したと分析している。

(11) 次の文献を参照した。

- ・沼本克明『観智院本類聚名義抄和音分韻表』(鎌倉時代語研究 3、1980 年)
- ・沼本克明『平安鎌倉時代に於る日本漢字音に就ての研究』(武蔵野書院、1982 年)

(12) 中国語音韻史上において、切韻系韻書に代表される中古音 Ancient Chinese の音韻体系が唐代中期には相当の変貌をとげる。その顕著な音変化として、鼻音声母の非鼻音化現象 (denasalization) がある。次の文献に詳しい。当該部分を以下に引用する。

・中国文化叢書 1 『言語』(大修館書店、1967 年) 所収、II - 3 「中古漢語の音韻」(平山久雄)

「鼻音声母の調音に際して、破裂に先立って口蓋帆の上昇が行われるようになり、鼻音声母の後半が非鼻音化する現象をいう。したがって、明母 m → mb, 泥母 n → nd, 疑母 ŋ → ŋg, 日母 ɲ → ɲʒ, 微母 ɱ → ɱv の如くなるのである。」(p.161/1.17-21)

(13) 声母は「七音」に分類する。牙喉音とは牙音と喉音のこと。以下に、声母に関わる七音と三十六字母の関係を集約しておく。中古音については三根谷説の推定音によった。

〈七音〉	唇音		舌音		牙音	齒音		喉音	半舌音	半齒音
	重唇音	輕唇音	舌頭音	舌上音		齒頭音	正齒音			
〈清〉	幫 p	非 f	端 t	知 t̚	見 k	精 ts	照 tʂ	影 ʔ		
〈次清〉	滂 pʰ	敷 fʰ	透 tʰ	徹 t̚ʰ	溪 kʰ	清 tsʰ	穿 tʂʰ			
〈濁〉	並 b	奉 v	定 d	澄 d̚	群 g	從 dz	牀 dʒ			
〈清濁〉	明 m	微 ɱ	泥 n	娘 ŋ	疑 ŋ			喻 j	來 l	日 ɲ
〈清〉						心 s	審 ʃ	曉 x		
〈濁〉						邪 z	禪 ʒ	匣 ɣ		

(14) 次の複製と索引を参照した。

・古辞書音義集成 12 『金光明最勝王經音義』(汲古書院、1981 年)

(15) 注 (04) の文献を参照した。

(16) 七五六例は仮名音注を付載する節用文字の掲出語を数えたものである。そこに含まれる熟字それぞれを別々にして数えれば、一二〇八例となる。なお、【表 1】の最後尾は番号 755 となっているが、途中で番号 756 「躑」(ヲ篇) が存在する。資料整理の段階で、掲出字の重複があった番号 050 を訂正・調整した結果である。